



Title	ナガサキを生き抜く
Author(s)	小峰, 秀孝
Citation	架橋, 13, pp.1-26; 2013
Issue Date	2013-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10069/33730
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-26T00:06:55Z

ナガサキを生き抜く (Survival in Nagasaki)

小峰 秀孝 (Hidetaka KOMINE)

1. 被爆―残るケロイド
2. 小学校でのいじめ―家で待つ母
3. 被爆者への差別―失恋と自殺未遂
4. 妻との別れ―長女の非行
5. 海外での活動
6. 質疑応答

「講話者のプロフィール」

小峰秀孝さんは、一九四〇年十一月二十九日、長崎市西郷狩股（現在の西町）の果樹農家の三男として生まれました。一九四五年八月九日、当時四歳八か月だった小峰さんは、爆心地より北方約一・五キロメートルに位置する自宅裏の畑でびわの木に登ってセミを捕っていたときに被爆し、両手、両足、腹部に大やけどを負いました。右足は熱線のため変形してしまいました。一九四七年四月に入学した西浦上小学校では、この右足のケロイドのために、生徒や教師からいじめを受けました。

一九五六年三月に西浦上中学校を卒業後、理容店で奉公しながら理容学校に学び、理容師の国家試験に合格されました。その後、恋人ができましたが、その親の反対にあいました。小峰さんは絶望から自殺をはかりましたが未遂に終わり、関西に移って、後を追ってきたその恋人と一九六六年三月に結婚しました。一九六八年には、長崎市音無町に自営店「理容小峰」を開業するにいたしました。一男二女に恵まれましたが、一九七七年四月に離婚をします。その後、理容店を営みながら三人の子どもさんたちを独立させ、一九九一年に語り部活動を開始されました。自らの被爆体験と戦後の経験を語るほか、劣化ウラン弾による放射能障害や原発事故のことなどについても発言され、その活動は日本のみならず海外にも及んでいます。

現在、「長崎原爆青年乙女の会」事務局長。著書に『じいちゃんその足どんげんしたと』（新風書房、一九九七年）があります。この英語版も近く出版されます。

講話

被爆―残るケロイド

小峰 皆さん、おはようございます。いま、皆さんの前に立っているわたしは、たぶん、普通のおじいちゃんに見えると思います。でも、もし、わたしがここで裸になったら、皆さんは顔をそむけるでしょう。両手はそうでもないのですが、わたしの胸、お腹、両足には火傷によるケロイドがあります。本当に汚いです。

わたしは一九四〇年生まれで、いまはちょうど七〇歳です。原爆が落ちたときは、四歳八か月でした。まだ幼かったため、戦争も原爆もわかりません。では、今日、なにを話すのかというと、自分の生き様です。一人の被爆者かどうな生き方をしてきたのかを話します。よく、講演の感想文に、「小峰さんの話は身の上話だ」と書かれています。その通りです。身の上話という真実です。作り話でもなく、脚色もしていません。

わたしは、爆心地から北のほうに一・五キロ離れた長崎市の西郷狩股（現在の西町）に生まれました。この西郷狩股には全部で八九軒の農家がありました。わたしの家は山奥にあつて、三六〇度山に囲まれた一軒家でした。電気もガスも水道もありませんでした。原爆で、西郷狩股では十五名の人が亡くなりました。亡くなった人のほとんどが家の外にいた人です。家の中にいた人はほとんど助かりました。わたしの家は、祖父、両親、姉妹の八人家族でした。一番上の兄は戦争に行っていました。

わたしの家は果樹園（経営農家）でした。原爆が落ちたとき、わたしはびわの木に登って、セミを捕っていました。セミを捕っていると、たぶん、ピカッと光ったように思います。はつきりとは覚えていません。その次に、爆風が吹き、叩きつけられました。飛ばされたのではなく、「叩きつけられた」のです。ボーン、と。あまりのショックに意識

がなくなりました。しばらくして意識が戻り、顔を恐る恐る上げました。まず、びっくりしたのは、一年で一番山の緑が濃いはずの八月にもかかわらず、山が灰色になっていました。その光景はよく覚えています。そして、だんだん夏の夕立みたいに空が薄暗くなってきました。見上げると、ものすごい量のごみが舞い上がっていました。わたしは怖くなって家まで逃げて帰りました。家は潰れていました。わたしはすぐに防空壕に避難しました。

そこで、初めて自分がやけどを負っていることに気づきました。四歳八か月の子どものお腹はまだこのくらいの大きさです。そんな小さなお腹に、こんなに大きな、ピンポン玉ほどもある水膨れがたくさんできていたのを、いまでもしっかりと覚えています。のちに母から、「あのととき、防空壕の中で、お父さん、兄弟、お母さんたちみんながお前を代わる代わる抱いていたんだよ。腕の中で、お前はものすごく暴れていた」と聞かされました。体半分を焼かれているので、痛みで暴れるのは当然です。わたしが「どうして寝かせなかったのか」と聞くと、母は、「そうすると、お前がいまにも死にそうだったから抱いていた」と言いました。

翌日、家族がすぐに掘立小屋を作ってくれました。日陰になるように、びわの木の下に作ってくれました。もちろん、壁などはありません。そこに祖父とわたしの二人は寝かせられました。祖父は右肩から手首までを火傷したただけでしたが、一週間後に亡くなりました。

原爆による火傷の後遺症は、広島でも長崎でも同じ症状だといえます。まず、皮がむけます。八月の暑い日だったので、すぐに化膿します。そして、ハエが異常発生しました。そのハエが、化膿して異臭を放つ体に卵を産みます。まだ死んでいない、生きている人の体にウジがわく、という現象は起こりました。葉がない、病院がない、医者がない、看護師もない、そうした街全体が崩壊した結果として、生きている体にウジがわいたんです。火傷だけでも痛いの、あのウジ虫が何百も体に乗ってきます。そうすると、ウジ虫が体の肉に食い込むんです。のちに母は、「お前はあのととき、『母ちゃん、ほくを殺して、ほくを殺して』と大人のようなことを言っていた」と言っていました。で

も、そのくらい痛かったのです。しばらくして、その痛みから少し解放されました。しかし、次に、髪の毛が抜けました。鼻、歯茎、お尻から出血します。そして、紫色の、米粒より少し大きい斑点が体中にできます。わたしだけでなく、被爆したほとんどの人の体に斑点ができていたそうです。そんな中で、大勢の人が死にました。原爆が投下されてから五日後くらいに、やっと部落に救護班が来ました。父がわたしを抱いて、救護班のところに連れて行ってくれました。しかし医者からは、「この子は体を半分焼かれていますので、もう助からない。家で最期を迎えなさい」と言われました。わたしは体にペンキのようなものを塗られ、帰られました。「やっばり、死ぬんだ」と思いましたが、死の感覚がわかりませんでした。わたしは、なぜ人間は死ぬのだろうか、自分はいつ死ぬのだろうか、ということばかりを考えていました。掘立小屋に祖父と二人寝かされているあいだ、父、母、兄弟、家族の誰かが必ず小屋にいてくれ、「秀孝、頑張れよ、死ぬなよ」と声をかけてくれました。その声でわたしが生きようと思ったことは事実です。人間の体の七十パーセントは水分でできているといいますが、喉も渴いて、水がほしかった。わたしは生き延びました。ったのかわかりません。体が乾いて、唇が切れていました。喉も渴いて、水がほしかった。わたしは生き延びました。生き延びましたが、わたしの体にはケロイドがあります。しかし、縦幅一センチくらいの普通の皮膚がお腹に横一本あります。まともな皮膚です。なぜ、ここだけ火傷していないのか、だいぶん考えました。考えた結果、火傷していないところはパンツのゴムの痕だったんです。その部分だけ火傷せず、皮膚だけが残りました。いまでもすーっと一本だけまともな皮膚が残っています。あとの皮膚はでこぼこになっています。

六十六年もたつと、少しですが、胸、お腹の傷は癒えてきました。しかし、足はなにも変わりません。わたしの足の甲には大きなケロイドがあります。ケロイドってわかりますか。見たことありますか。皆さんが小さなころ、遊んでいて、ひっかき傷を負ったときに、ミミズ腫れができたでしょう。それより何十倍も大きいのがケロイドだと思ってください。わたしの足の甲には縦三センチ、横二センチくらいのケロイドができました。そのケロイドがだんだん膨

れ上がるにつれて、周りの肉を筋肉と一緒に引つ張ります。一番丈夫な筋肉は、足首。一番弱い筋肉は、五本の指。特に、親指以外の四本の指の筋肉は弱い。ケロイドが膨れ上がるにつれて、四本の指の筋肉は引つ張られて、指はどんどん曲がります。急劇に曲がります。ここからはわたしの見解ですが、急に引つ張られた筋肉は元に戻ろうとする。膨れ上がるケロイドは周りの筋肉を引つ張ろうとし、周りの筋肉は元に戻ろうと引つ張り返す。被爆してから八か月が経ち、やっとわたしは歩けるようになりました。八か月もかかりました。八月、九月、十月、十一月は、布団に入つて寝ていると、暑くなります。体が温まると、治りかけの傷がかゆくなるんです。かゆみは痛みよりもつらいです。わたしが寝ているあいだ手で搔かないように、母が手袋を作ってくれました。傷がかゆくなつてくると、はじめはさするだけなのですが、そのうち、我慢できなくなり、手袋をはずして、搔く。搔くとヒリヒリして痛い。そして、搔いた指を見ると、血がついているのが月明りで見える。搔くから、なかなか治らない。そして、歩けるようになるまで、八か月もかかった。

歩けるようになっても、履物は藁草履。当時は、靴なんてなかった。店にも売つてなかった。みんな下駄か、藁草履を履いていました。わたしの家族はもちろん藁草履でした。父がわたしのために藁草履を作ってくれました。しかし、足の指が曲がつてしまっているので、履くことができない。だから、紐で藁草履を足にくくりつけました。第一歩を踏み出した瞬間、膨れ上がったケロイドに重圧がかかり、一気にケロイドが裂けました。もちろん、血が出ました。目から火が出るほど痛かったです。しかし、薬も、包帯も、なにもない。栄養状態も悪い。だから、なかなか治らない。その傷が治るのに半年かかりました。まだ幼かったわたしは、一度痛い思いをしたことをすっかり忘れて、また同じように足を踏み出し、痛い思いをしました。一回もやると、いくらわたしでも学習しました。どうやって歩くか。ケロイドがある足首を絶対に曲げないように、右足を引きずつて、ゆっくり歩きました。

小学校でのいじめ―家で待つ母

一九四七年四月、わたしも小学校へ通うことになりました。小学校の全校生徒は約九百名。わたしの家から学校まで、元氣な一年生で四十分から四十五分かかります。わたしはその大体三倍から四倍の時間がかかりました。夏は約二時間。冬は約二時間四十分かかりました。温暖な長崎でも時々、雪が積もります。平地では五センチくらいでも、山では二〇センチも三〇センチも積もります。わたしの家は原爆で果樹園がなくなつたため、収入はゼロでした。そのため、下着も買えず、着ているのは学生服だけでした。やっと買ってもらった学生服。しかし、ベルトは買えなかつたので、藁を編んで自分で作ったベルトをしていました。学生服一枚に、藁草履。積もつた雪の上を歩くのは、痛いなんてもんじゃやない。裸足で雪の上を歩いているようなものだから。ずっと歩いてみると、手も足も針で刺すように痛くなる。そして、感覚がなくなる。手袋ははめていません。そして、よく滑りました。滑って、転んで、必死で学校に向かいます。そうやって一生懸命に歩いていると、いくら学生服一枚しか着ていないとはいえ、体が火照ってきます。新雪の上を歩くときの感覚はとても楽しいものです。ほかの生徒はみんなわたしを追い越して、雪の上を歩いていきました。みんなが歩いたあとには、シャーベット状になります。ちよつと一休みして、自分が歩いてきたほうを見ると、シャーベット状の雪に点々と血がついています。

学校につくと地獄でした。小学校一年生の時の担任は、大久保先生でした。女の先生で、ものすごく優しい先生でした。わたしが学校に着くと、暖かどつてある宿直室にわたしを連れて行って、「早く温まりなさい」と言ってくれるような先生でした。しかし、生徒からは組織たつたいじめを受けていました。五人グループの人たちです。その人たちは毎日毎日、わたしをいじめました。五人グループから一番始めにつけられたあだ名は「腐れ足」。その次は「鳥の足」。「腐れ足」というあだ名は見た通りなので、自分でも納得できました。しかし、なぜ「鳥の足」とつけられたの

かわかりませんでした。いまでもわかりません。あだ名で罵られ、裸にされ、ケロイドがひどく残る体を見世物にされる。本当につらかった。そういう地獄に行きたくなかった。

毎朝、特に雪が降った日は朝早く起こされます。「早く行きなさい」と母が急ぎ立てます。「学校に行きたくない」とわたしは駄々をこねました。駄々をこねるわたしは、何度か母に蹴飛ばされました。「このほかたれ、学校に行け」と言つて、絶対に許してくれませんでした。わたしは泣きながら、「母ちゃんは鬼だ」とよく言いました。でも、世の中に子を恨む親はいません。わたしを蹴飛ばし、泣きながら学校へ向かうわが子の姿を母はどんな気持ちで見ているのだろう。

一年生の夏休み。うちは貧乏でお金がありませんでした。母は何とかわたしの足を治してあげたいという親の一心で、長崎中のいろんな人からお金を借りてきました。しかし、それでも手術代には届きませんでした。佐賀に伯母がいました。伯父さんは、佐賀県警の副署長で、子どもがいなかったため、経済的に余裕がありました。そして、伯母さんが「これで治してあげるからね」とお金を持つてきてくれました。これでいじめられなくなる、遠足にも行ける、運動会で走れる、と思いました。わたしは三回手術をしました。これは二回目の手術をした時の写真です。この状態でも二回の手術をした後です。一番挟れているところがケロイドです。いまでも肉が引つ張り合っています。一回目の手術のあとには、まだ一・五センチくらいのケロイドが残っていました。わたしが先生に、「骨が見えるところまで、挟り取ってください」と言つたので、一回目の手術で取れるだけ取り、その結果、こんなに穴があいてしまいました。この写真は三回目の手術をする直前の写真です。

わたしは三年生の終わりがさまでストレス解消のために学校のできごとをすべて母に話していました。いつも酷いことを言っていました。「母ちゃん、今日も番長から見世物にされて、殴られた。あの番長は車に轢かれて死ねばいいのに。」「母ちゃん、今日アメリカ兵にあった。石を投げつけたかった」こんなことをよく言っていました。

四年生になったある日、母が「秀孝、ちょっとそこに座れ」と言い、座らされました。「悪いけど、お前の原爆のケロイドは一生治らない。もしかしたら、一生いじめられるかもしれない。そうしたら、お前は一生、人の悪口を言っているのか。そんなみじめな生き方はないぞ。黙って聞いていけば、アメリカが憎いとお前は言うが、よく考えてみなさい。本当にお前が憎まなければいけないのは原爆、そして戦争のはずだ」そのとき、母はそうわたしに説教しました。それからもう母には学校のできごとを話しませんでした。そうすると、どんどんストレスがたまりました。そのはげ口として、わたしは絶対にやっつてはいけないことをやりました。

なにをやったか。ありとあらゆる小動物、子犬、子猫を捕まえて、ぐちゃぐちゃになるまで、これでもか、これでもか、と返り血を浴びながら鬨り殺しました。一方で、家ではいい子でいました。わたしの家は山の中の一軒家だったので、小学校に行くまで、ほとんど他人と接点がありませんでした。それが、急に世間に出され、団体生活の中に入りました。でも、その団体生活はわたしにとつてあまりにも悲惨なもので、つらかった。だんだん、人間不信になり、人間が怖くなりました。だからこそ、家族からだけは嫌われないように、本能的にいい子でいたんだと思います。

わたしの家は果樹園でしたが、原爆で果樹園がなくなつたため、みんなで残つた木の根を掘り起こしました。その作業は二年くらいかかりました。そして、やつとの思いで、畑を作つて、米や野菜を作りました。しかし、米や野菜作りの素人が作つたものは、なかなか売れませんでした。五年生のとき、父が牛を買いに行きました。いまは、みんな機械で田畑を耕しますが、当時は牛で耕していました。牛の労働力は人間の五倍も十倍もあつたからです。わたしはてっきり、即戦力になるような牛を買つてくると思つていました。しかし、買つてきたのは、このくらいの牛でした。お金がなかったのです。子牛しか買えなかったのです。そして、その子牛の面倒はわたしが見るようと父から言われました。当時、わたしたちが食べていた動物性たんぱく質は魚でした。いまは高いですが、当時は安かつたイワシ、アジでした。しかし、お正月の三箇日だけはごちそうでした。鶏でした。年末に大きい鶏を買つてくればいいの

に、ヒヨコを買ってきて、ヒヨコから育てました。そして、そのヒヨコの面倒を見るのもわたしの仕事でした。

みんなでこんなに大きな牛小屋を作ったんですが、その隅に小さな箱を置きました。その箱に格子と入口を作って、二羽のウサギを買いました。わたしがウサギを買いたがっていたので、誰かからウサギをもらってきたのでしょうか。ある日、ウサギが赤ちゃんを産みました。かわいい赤ちゃん。その赤ちゃんは、わたしにとつて単なるウサギの赤ちゃんではなく、親友でした。人間との接点をできるだけ避けるために、毎日ウサギの赤ちゃんと遊びました。メスだったので、女の子の名前をつけていました。その赤ちゃんがこのくらいの大きさに成長すると、わたしの姿を見たり、わたしが名前を呼べば、親ウサギを押しつけて、箱の入り口でわたしを待つようになりました。入口を開けてあげると、ぴよんと出てきて、どこへ行くにもわたしのあとをついてきました。かわいいくてたまりませんでした。

ある日、わたしが学校から帰ってきて、牛小屋に行き、ウサギの名前を呼んでも、いつものように出てきません。あれっと思つてウサギの箱をよく見ると、なんと、血がついていました。びっくりして、まさかと思いましたが、これくらいの大きさに成長した子ウサギが真っ赤になつてかみ殺されてしまいました。小動物を馴れ馴れしいが、わんわん泣きながら庭の隅に穴を掘り、子ウサギを埋めてあげました。なぜ、子ウサギが親ウサギに殺されたのか、わかりませんでした。父に尋ねたら、「お前があんまり子ウサギを触るから、子ウサギに人間のおいが移つてしまい、親ウサギが敵だと思つて噛み殺したんだ」とわたしに説明しました。そのとき、父から、「もう小動物をいたぶつて殺すのはやめろ」と一回くらい言われました。

いよいよ正月を迎えました。わたしが飼つていた鶏もわたしが小屋へ行くと、餌を目当てにわたしに寄ってきます。わたしが鶏を捕まえると、父は庭の隅に枕木を置いて、なたを持つていて、何度もわたしに、「秀孝、鶏をしつかり押さえて、持つて来い」と言います。訳もわからず捕まえられた鶏は自分の死を悟つていようでした。刑場に向かうまでの数メートルの間、鶏はわたしを蹴る、つつく。その蹴り方も異常なくらい、痛いくらいに蹴る。刑場で鶏を押

ささると、ばたばた暴れます。父が「しつかり押さえておけ」と言うので、わたしは鶏を見ずに押えました。絶対に見ませんでした。父が頭を切り落とした瞬間、押さえていた鶏の体が痙攣したので、いま鶏の頭が切られたんだというところがわかりました。びっくりして手を離してしまつと、心臓の鼓動に合わせて、首から血を吹き出しながら、だんだん弱つていきました。それを見て、わたしは座り込み、生汗をだらだら流して、嘔吐しました。その鶏はわたしたち家族に食へられるために殺されました。これは仕方がないことだと思ひます。ただ、それまでわたしが殺してきた何百もの小さな動物の命のこと。子ウサギの死、鶏の死、この二つの死を見たときわかりました。小さな命でも命なんだ。おれはなんて酷いことをしてきたんだらう。そうした自分への憎悪やいろんなものが出てきて嘔吐しました。

わたしは五年生のときに一度だけ、死のうと思つたことがあります。皆さんは見世物にされたことがありますか。人に見られたくないものを見られる。死のうと思ひましたが、ただ死のうと思つたわけではありません。わたしは、いつもわたしをいじめるリーダーを二発殴つてから死のうと思ひました。しかし、実際にリーダーの前に行くと、心臓がドクドクして、決闘を言い出せませんでした。ちようど、麦の穂が色つくころ、心臓の音が聞こえるくらいドキドキしながら、ついにリーダーに決闘を申し込みました。いじめっ子は五人グループでしたが、そのうち二人は決闘に反対しました。たぶん、わたしのことを可哀そうだと思つてくれたんでしょう。決闘が始まります。

言い忘れてましたけど、三年生のとき、学校でいつものように横歩きで歩いていました。すると、男の書道の先生が近づいてきて、「小峰、お前はまっすぐ歩けないのか。まるで『がね』みたいだな」と言いました。「がね」は方言で、「カニ」という意味です。そして、先生はわたしの歩き方を真似して見せました。一年生のころの大久保先生は優しかったのに、同じ先生でもこんなに差がある。わたしはものすごく恥ずかしかったです。そして、悔しくて、悲しくて、いろんな感情がこみ上げてきました。そして、アメリカ力に対する憎しみがどんどん増長していきました。わたしは手術をしたあとで、また手術痕が癒えていませんでしたが、それでも、歯を食いしばつて、毎日まっすぐ歩く練

習をしました。まっすぐ歩けるようになるまで約三か月かかりました。それでも、やっぱり少し右足を引きずって歩いていました。

さあ、リーダーとの決闘です。麦畑の中で、わたしはボコボコに殴られました。わたしがリーダーに勝てるわけがない。リーダーは毎日喧嘩をしていて、体も大きい。でも、人は異常に興奮したときは、少々殴られても痛みを感じない。これ以上リーダーから殴られまいとして、彼の背中に手をまわしてありつた力の力でリーダーを持ち上げました。リーダーの足が宙に浮きあがり、それでもなお、リーダーを締め上げました。すると、リーダーの殴る力が半減し、パンチは当たりにくくなりました。そして、そのままリーダーを押ししました。

クズという植物があります。このくらいでも、大人の男でも切れない、丈夫なつるがある植物です。秋になると赤紫の花を咲かせ、実をつけます。京都には独自の食文化がありますが、いまでも京都では、クズの根を食材として使った郷土料理があるそうです。クズはわたしの命の恩人なので、どんな植物か勉強したんです。リーダーはわたしに押され、そのクズのつるに引っかかって倒れました。麦畑の土は柔らかいですから、その中に倒れこんだら、体の半分くらいが麦に埋まります。わたしはリーダーが起き上がらないように馬乗りになり、足で踏ん張って、殴りました。あのとときは、あんまり足の痛みは感じませんでした。一度も喧嘩をしたことがないわたしは異常に興奮していました。なかなかまともにパンチが当たりませんでした。運よく、彼にとつては運悪く、彼の前歯に当たりました。彼の前歯が二本折れました。そして、リーダーが「小峰、やめてくれ」と言ったんです。わたしはすぐにやめました。わたしは勝ちました。何はともあれ勝ちました。鼻血を拭きながら、いつものように一時間以上かけて帰りました。家に着くころには、ほっぺたについた鼻血が乾いて、髭みたいになっていました。どうりで、すれ違う人たちがわたしを見て笑うわけです。家に帰ると、母から「その格好はどうしたの?」と言われました。わたしは「母ちゃん、おれ、リーダーと喧嘩して、勝ったよ」って言ったんです。そうすると、二度目に母は「よかったね」と言いました。わたし

しがじめられているのは、三年生の終わりまで話していましたが、その後もうじめが続いていたことも母は知っています。きつと母は、何とか自分の力で、いじめに打ち克つてくれないか、と思っていたのでしよう。思いもよらず、わが子が血だらけで、泥だらけになって帰ってきて、その息子から「勝った」と聞かされた瞬間、「よかった」という本音が思わず出てきたんだと思います。喧嘩して、学生服を破って、「よかったね」という親はいません。

わたしは著書の『じいちゃん、その足とんげんしたと』で「わたしは母を世界一尊敬する」と書きました。いまでも、その気持ちは変わりません。残念ながら、去年（二〇一〇年）の九月二十五日、百三歳で老衰のため天国へ行きました。人は言います。「百三歳まで生きれば、幸せだね」と。でも、わたしは、母に百五十歳でも二百歳まででも生きていてほしかったです。なぜ、わたしにとつて母は世界一の母なのか。簡単です。わたしが小学校へ入学したその日から、卒業するまでの六年間、ずっとわたしの帰りを待っていてくれた、ただそれだけです。冬の寒いとき、わたしは手がかじかみながら帰ってきました。母は玄関の外で、わたしの帰りを待っています。「秀孝、この寒い中よく我慢して学校へ行ったね。早く家に入りなさい。」家に入ると、囲炉裏の薪に火がついていて、「早く暖をとれ」とわたしの体を温めてくれる。でも、感覚がなくなっている手と足を温めるには時間がかかります。手を腋に挟めたり、いろんなことをしました。学校では、上着を脱いで、感覚のない足を上着でくるんで温める。お湯につけたらすぐに温まるだろうと考えて、一度、お湯に手を入れたことがあるんです。そうすると、飛びあがるほど痛かったです。だから、囲炉裏に急に近づくことはできません。少しずつ、囲炉裏に近づいていって、体を温める。夏、台風ときでも母は絶対に迎えに来てくれません。わたしは吹き飛ばされそうになりながらも帰ってきます。暑いときは、汗だくになりながら、横歩きで帰ってきます。本当にきついです。整備されていない、石ころだらけの道を歩いて帰ります。雨が降ったら水たまりの道を歩いて帰ります。どんな日でも母は待っていてくれます。「暑い中よく頑張つて学校に行ったね。」裏庭の井戸には売物にならないスイカとかトマトが入っていて、「好きなものを食べなさい」と言ってく

れます。そして、母は野良仕事に戻ります。たったこれだけです。

一年生のころ、雪が降った日は「母ちゃんは鬼だ」と泣いて学校に行きました。学校という名の地獄では、逃げまどい、殴られ、笑いものにされていました。その地獄の中でも母だけが救いでした。「母ちゃんが待つてるから、家へ帰ろう。母ちゃんが待つてるから、早く家へ帰ろう」と。母はわたしにとつて天使でした。本当に天使でした。

被爆者への差別―失恋と自殺未遂

わたしは中学までしか卒業していません。もちろん、皆さんのように頭は良くありません。わたしは高校へ進学せず就職しました。はじめに、寿司屋の職人になろうと思いました。駅前の寿司屋に、履歴書を持っていきました。寿司屋のご主人がわたしを見て、「小峰君は被爆者ですか」と何気なく聞かれました。わたしも何気なく、「はい、被爆者です」と答えました。そうしたら、ご主人は少し考えて「小峰君、悪いけど、うちは食べ物商売だから、被爆者は雇えない」と言いました。わたしは、たぶんそう言われるだろうと思っていました。ここが問題です。なぜ被爆者は差別、偏見を受けたのか。

昭和三十二年に「原爆医療法」という法律がやっと制定されました。この法律は政治家が進んで、苦勞している被爆者のために制定したものではありません。被爆者の方たちが苦勞して東京に行き、厚生省をはじめ、いろんな機関へ働きかけてやっとできた法律です。この法律ができるまでの十二年間、国も被爆者を見殺しにしてきました。国から米粒一粒だつてもらっていません。それだけなら、まだ我慢できます。髪の毛が抜け、鼻血が出て死ぬなどの放射能による疾患・疾病は数限りなくあります。その中で最も酷いのが白血病です。被爆してから四五日して死んでい

く人たちは急性白血病でした。その次ががん。わたしもがんで死ぬ覚悟はしています。被爆者たちのほとんどががんになります。しかもがんの発生個所は一か所だけではないのです。被爆者のがんは多発性です。体中あちこちに、放射能が入っただけのがんができる。そして、死んでいきます。この白血病・がんは被爆した本人だけが怖いんです。そして、被爆者は結婚ができません。

なぜか。被爆者はいつ死ぬかわからないから。それに、被爆者の女性からは健康な赤ちゃんが生まれない場合があるりました。伝染病扱ひもされてきました。そして、何より、放射能をたつぷり浴びた体は、体がとてもだるくなるので、一日中働けません。被爆から三十年くらいその状態が続きました。したがって、被爆者の人は怠け者に見えます。長崎の方言で「怠け者」を「ぶらぶら」と言います。あの被爆者は遊んでばかりいる、と勘違いされ、「ぶらぶら病」という病名までつけられました。そして、被爆者は毎日働けないから貧乏になります。偏見・差別・いじめ・病魔・貧困。「原爆医療法」が制定されるまでの十二年間、大勢の被爆者が自殺しました。いま、被爆者の方たちとお酒を飲むと、ふと言いますが、ほとんどの被爆者は自殺の経験者です。わたしが住んでいた部落でも、二人の女性が自殺に成功しました。わたしの近所にナガトミさんというきれいなお嬢さんがいました。彼女は髪の毛が長くて、女学校に通っていた頭のいい人でした。あるとき、彼女が友達と歩いているところに、ころない大人が「あなた、被爆者でしょ。汚いね」と言いました。ケロイドはどす黒く、冬になると紫色になる。夏になると、血行が良くなって、赤くなる。本当に汚い。「君は被爆者だろ？ きたないねえ」と言われた彼女は下を向き、一緒にいた友達が「原爆じゃない。普通の火傷だ」と言い放ちました。しかし、彼女は翌日に自殺しました。本当に被爆者の自殺者は多かった。わたしの本職は床屋です。床屋になるのもたいへんでした。わたしが働いていたところは封建的で、わたしは丁稚奉公でした。五年働いて、一年間のお礼奉公。合計六年間働かないといけませんでした。入ったばかりの下つ端は朝から夜寝るまで、座ることができませんでした。座れるのはトイレのときと、ご飯を食べるときだけ。ご飯も急いで

食べないといけません。早く食べろ、とせつつかれるので、わたしはいまでも食事を済ませるのが早いです。奉公人は牛馬と少しも変わりません。立ちっぱなしなので、自然とケロイドがある右足を左足でカバーしてあります。左足にばかり体重がかかるので、むくんで、ものすごく腫れます。丁稚奉公なので、家に住み込みです。入ったところは子守りまでさせられます。わたしの足がひどく腫れているときは「家に帰りなさい」と言ってくれるので、足を引きずりながら帰ります。足を引きずりながら帰ると、母が泣きます。母は本当に泣き虫でした。母は一晩かけて湿布してくれました。そして、翌朝また出勤します。

二十歳を過ぎると、異性を意識するようになりました。二十四歳のとき、ある十九歳の美容師さんと出会いました。彼女は満州から引き揚げてきた人で、原爆のことにはなにも知りませんでした。わたしは思い切つて告白をしました「おれは被爆者だけど、付き合ってくださいませんか？」原爆のことをなにも知らない彼女は「いいよ」と言ってくれました。それは、小学校五年生のときの必死の決闘に勝利したときよりも、美容師の国家試験に合格したときよりも、もっとうれしかったです。おれにもガールフレンドができた。ところが、彼女とは三か月しか続きませんでした。彼女の父親から電話がありました。「もううちの娘とは付き合おうな」と。必ず言われるのが、「あなた被爆者でしょ」。二十四歳といったら、働き盛りで、将来の夢とか希望とかを頭の中に描いている年ごろです。その夢や希望ががらりと壊れました。わたしはいろんなハードルを飛び越えてきましたが、この失恋のハードルは飛び越えられませんでした。

仕事に行かなくなりました。理由はわからないけど、行きたくありませんでした。そして、ご飯を食べてもすぐ吐いてしまう。お腹は減るけど、食べるとすぐ吐いてしまう。夜も眠れない。どんなに頑張つて寝ようとしても、目が冴えて眠れない。昼も眠くならない。三日間一睡もしなかつたら、頭が変になります。そのぼんやりとした頭で思い浮かんだのが「死」でした。死のう、と思いました。わたしは睡眠薬をずっと持っていました。致死量がわかりませんでした。そして六月、台風で雨風が吹くときに、暗い部屋の中で睡眠薬を飲みました。簡単に聞こえると思いま

すが、いざ薬を飲むとなるとなかなか飲み込めない。水で無理やりに流し込みました。でも、全部は飲めませんでした。意識がだんだん遠のいていきます。そんななかでも、わたしは何かにすがろうとしていました。今度生まれ変わったら、絶対に被爆者だけにはならないと思いました。翌々日、わたしは病院で気がつきました。わたしは下剤か何かを飲まされ、嘔吐してしまいました。「生きてた、死に損なつた」と思いました。

わたしはあまり父の話をしたくありません。父の話をすると、ものすごく切なくなるからです。なぜでしょうか。わたしは被爆して、医者からも死ぬといわれました。わたしの火傷によく効いたのが天ぷら油でした。ツワブキって知ってますか。ツワブキは秋になると黄色い花を咲かせます。春になると、芯が食べられます。はじめは、ツワブキの葉を貼ってくれました。その次は、ジャガイモ。ジャガイモをすり潰して、紙の上に伸ばして、貼ってくれました。でも、それは飛び上るほどしみて痛かったので、一回でやめてもらいました。天ぷら油は効果がありました。その天ぷら油を求めて、父は、爆心地近くまで通っていました。いつ死ぬかわからない息子のために。助からない、いつ死ぬかわからないと言われても、毎日毎日、天ぷら油をもらいに行っていました。父は昭和四十八年、がんて亡くなりました。六十四歳でした。

亡くなる前の晩、わたしたち家族は全員病院にいました。姉が、「秀孝、お父さんが呼んでるよ」と呼びました。病院は個室です。父が寝せられているベッドは、死ぬ人のために作られたベッドでした。寝たきりだと、体がきついので、起こしたり、寝かせたりが自動的にボタン一つでできるように作ってあるベッドでした。父ははじめ、そのベッドに寝ることをものすごく嫌がりました。それはそうです。死ぬ人のために作られていることを知っていたので。父の近くに行くと、荒い息をつきながら、「手を握れ」と言いました。握った手は腫れぼったくて、冷たかった。じつとわたしの顔を見た父が、声を絞り出すように「秀孝、お前が一番心配」と言いました。言われたわたしはたまったもんじゃありません。なんてわたしは親不孝なんだ。わたしは山の中で号泣しました。その父が朝早く亡くなりました。無

口な父でした。わたしは父が大好きでした。

煙管って知っていますか。タバコの葉を詰めて吸う道具で、先に真鍮がついています。父は喜怒哀楽を煙管で表現していました。わたしが自殺未遂をしたときは、意識が戻ったわたしを見て、涙を流しながら、わたしの頭を軽く叩きました。父が本当に怒ったときは、三回、たんごぶができるくらい強く煙管で頭を叩きました。でも、母は違いました。自殺未遂をしたわたしの顔を見て、「こういうことは二度とするな。わたしは命が縮んだ。秀孝、よく聞きなさい。」失礼があると思ひ、いまままで話したことはなかったのですが、母は、「秀孝、よく聞きなさい。世の中には目が見えなかったり、耳が聞こえなかったり、話すことができなかったり、生まれつき手がなかったり、足がなかったりする人がたくさんいる。でもみんな一生懸命生きてる。それでしょう？ お前はただ火傷をしただけだ。五体満足じゃないか。本当に死にたいと思うときは、地を這いずり回ってでも生きろ。それが生きるといふことだ。」母はわたしにそう論しました。

妻との別れ―長女の非行

わたしは長崎にいたくありませんでした。失恋の傷が癒えないまま大阪に行きました。大阪に行つて、一週間目に一本の電話がかかってきました。彼女からでした。「家出して、大阪まで追いかけてきた」と言うんです。大阪駅まで迎えに行きました。また慣れていない土地で、どこをどう探していいのかわからない。やつとの思いで見つけた彼女は、小さなカバンを持って、泣きながら待っていました。わたしは働いていた美容院に彼女を預けて、彼女の親に電話しました。そうすると、彼女の親は、「家出をするくらいだったら、結婚を許す。」と言つてくれました。そして、

二十六歳のとき、結婚式を挙げました。皆さんはもう大学生だから話してもいいでしょう。結婚したのはいいけれど、飲めないお酒を少し飲んで、迎えた初夜。わたしの体のケロイドを見られました。彼女はびっくりした顔をしました。そして、わたしに背中を向けて、肩を震わせていました。たぶん、泣いていたんでしょう。わたしは彼女にかけてやる言葉がありませんでした。何て言ったらいいかわからない。わたしは彼女が明日の朝、家へ帰ると言ったら、なにも言わずに帰そうと思いました。でも、彼女は帰らなかった。帰らなかったんじゃないかと、帰れなかったんだと思います。きつと父親から「お前は被爆者と結婚するんだ。覚悟はできてるな」と言われてきたはずですが。彼女はわたしと一緒に居らざるをえなかった。大都市、大阪で彼女が頼れるのはわたしだけでした。そして、子どもが生まれまして。女の子でした。陣痛が始まってから生まれるまで三日かかりました。その間、彼女をお風呂につれていたりもしました。そして、やつとこのことで女の子が生まれたのです。どの親も一緒ですが、わが子は五体満足だろうかと、手の指を広げてみる、足の指を広げてみる。わたしは被爆者です。涙が出ました。涙を流すわたしを看護師さんが不思議がっていたので、「わたしは長崎の被爆者です」と言ったら、「健康な赤ちゃんが生まれてよかったですね」と言われました。そのころ、貧乏だったわたしの実家は土地を売って、土地成金になりました。お金をもった父は、わたしに長崎に帰ってくるように言いましたが、わたしは帰らないと言いました。それでも父は何度も、長崎に帰ってくるように言い、最後には「長崎に店を建ててあげるから、帰ってこい」と言ってくれました。わたしは二つ返事で、長崎に帰ってきました。小さな床屋でした。そのころには三人の子どもがいきましたが、みんな健康に育っていました。子どもが九歳、六歳、一歳半のとき、妻が「別れてくれ」と言ってきました。わたしは「いいよ」としか言いようがありませんでした。被爆者であること、醜い体であること、四歳八か月から虐げられてきたこのひねくれた心。この三つがあつたら十分です。妻は出ていきました。わたしに残ったのは三人の子どもです。わたしにとつては地獄ではありませんでしたが、子どもたちにとつては地獄でした。夜中に目が覚めたとき、風邪をひいて具合が悪いとき、

必ず母がそばにいました。「母さんがいるからね。心配しないでいいよ。早く寝なさい」と言つてそばにいてくれた母が、自分たちを見捨てるわけがないと思う。誰しも思う。母がいなくなつて、一か月、半年が経ち、そこで初めて、自分たちは見捨てられたとわかる。でも、子どもたちはまだ幼すぎて、なにもできない。一方、わたしは手が四本あつても足りないくらい忙しい。仕事もしないといけない。ご飯も準備しないといけないし、洗濯もしないといけない。つい、九歳の長女に「お姉ちゃんだから、皿を片付けなさい」「お姉ちゃんだから、掃除しなさい」「お姉ちゃんだから、お姉ちゃんだから……」と言つていました。わたしは、長女でもまだ幼い子どもだということに気がなかつた。彼女がどんなに心を痛めていたか、わからなかつた。母親がいなくなつて頼れるのは父親だけなのに、その父親から突つばねられたら……いま考えるとぞつとします。なぜ、あのとき、わたしは一日のうち一回でも二回でも抱きしめてやらなかつたのか、悔やまれます。

長女が中学二年生のとき、わたしに反抗してシンナーを始めました。地獄です。母親にも言えませんが、兄弟にも言えませんが、他人にはなおさら言えませんが、いつか母が言つたように、あのときは地を這いずり回るような思いでした。絶望、そしてなにもありません。娘がシンナーを吸つて帰つてきます。親は馬鹿です。夕方くらいから降つてた雨が夜になると、みぞれから雪に変わりました。わたしは、今日こそは、帰つてきたらぶん殴つて説教しようと思つて待っています。でも、雪が降り出すと、風呂を沸かすんです。「ほか娘、こんな寒い日に」と思い、風呂を沸かします。娘は顔を青くして帰つてきます。近くによるとシンナーのおいをさせて。そんな娘になにも言えない。「ほか娘！早く風呂に入って寝なさい」と言う程度。別の日も娘はシンナーを吸つて帰つてきました。あとの二人のことは忘れて、長女と二人で死のうと思ひました。

暗い中、意識がない娘の手を引いて、線路のあるところに行きました。わたしの店のすぐ隣は交番でした。その交番には林田巡査部長という方がいました。彼には本当にお世話になりました。巡回中の林田巡査部長に出くわしまし

た。彼は、わたしたちの様子を変たと気付き、わたしたちは交番に連れていかれ、説教されました。そのとき、彼はこう言いました。「わたしは何人もシンナー中毒者を見てきた。悩んでばかりではだめだ。こうなったら国にすかれ」と。はじめは「国にすがる」という意味がわかりませんでした。わたしは思いつきました。わたしはなんと、自分の娘を警察に四回通報したんです。密告しました。「うちの娘が仲間とシンナーをやっているみたいです。捕まえてください。助けてください。」と四回、通報しました。そしたら、四回目の通報で裁判が開かれ、娘は鑑別所に入れられました。そのときの裁判官が裁判開始前にわたしを別室に呼び出して、わたしが部屋に入るなり、「小峰さん、あなたは偉い父親ですね」と言いました。

「なぜですか?」と聞くと、「普通、こういうことは隠すんです。」裁判官はわたしに、「娘さんを国が預かりますが、いいですね」と確認しました。判決のとき、裁判官は、「あなたはお父さんのところでこの病気を治すことはできないから国が預かります。いいですね」と娘に言いました。そこで、彼女はやっと目が覚めました。彼女も鑑別所内の様子を聞かされ、なにをされるかわかっています。彼女は振り返り、後ろに座っているわたしに向かって、「お父さん、一度としないから助けて」と言いました。しかし、もう手遅れです。そして、黒い公用車に押し込まれて連れて行かれるときに、何度も振り返り、「お父さん助けて」と繰り返しました。あのときは本当につらかった。家に帰って、いまごろ、なにをされているのだろうと思うと、涙が出てくる。自分もつとつかりしていればこうはならなかったと、自分を責めました。でも、こうなってしまった以上、仕方がない。三週間後、帰ってきた娘の顔を見たときに「この子はもう二度とやらない」と思いました。それから、彼女は二度とシンナーに手をつけませんでした。彼女はいま、結婚して四人の母親です。わたしが昔、彼女に言っていたことを、今度は彼女が自分の子どもたちに言うんです。聞いていて面白いです。彼女は夫と頑張つて、家を建て、朝日が一番見えるところにわたしの部屋を作ってくれました。いまはその家で一緒に生活しています。いいことばかりではありません。親子なので喧嘩もします。

でも、いまはなんとなく幸せに暮らしています。

海外での活動

ちよつと話は変わりますが、東日本大震災が起りました。科学の粋を尽くして作った原発。いったん壊れると、人間の力ではどうすることもできない。わたしは二〇〇九年に原爆資料館でインターネット講義をしました。一九八六年四月二十六日にチェルノブイリ原発が爆発しましたが、そのときに作業員として働いていた人が八万人いたそうです。いまでも、完璧に放射能は抑えきれていなく、周辺地域は立ち入り禁止区域になって、人は近寄れません。わたしはチェルノブイリの近くにあるゴメリ医科大学のお医者さんや看護師さん、大学生の方たちとインターネット講義をしました。約三十分の講義でしたが、その中に、三十代前後の女性の方で、頭に包帯をし、髪の毛が抜けているのを隠している人がいるのに気が付きました。わたしが「放射能障害ですか」と聞くと、「そうだ」と答えました。言葉を失いました。講義を聴いている人の中には、涙を流している人もいました。わたしが話してきたことと、彼らが体験したことがそっくりだからです。たぶん、チェルノブイリ原発が爆発したときに、彼らは放射能を浴びたのでしょう。それが、二十三年たったいま、彼らは放射能障害を発病したのです。福島原発のことも、テレビではいろんなことを言っています。子どもには絶対、放射能を浴びてほしくない。二十年、三十年、六十年経ってもがんが発病する可能性があるからです。放射能はたとえほんの少しだつて体内に入つてはいけません。それだけ放射能というのは怖いものなんです。放射能七百ミリシーベルトで人間は百パーセント死ぬんだそうです。一日も早く、一分でも早く、福島原発が収束してほしいと願います。

二〇〇四年にわたしはニュージャージー州に一週間訪れました。ホームステイで家々を回りましたが、アメリカで一番初めに感じた印象は、いろんな民族がいっぱいいるな、ということでした。わたしには二十四時間通訳として、アズサという日本人の大学生がついていてくれました。わたしがキッドという人の家に泊めてもらって、キッドに次の家へ送ってもらっている途中、キッドが突然「ヒデ、アズサ、ここで降りて、スピーチしなさい」と言いました。わたしとアズサは訳が分からないまま、車を降りました。歩道のわきに、高さ四メートルくらいの塀があって、その前に高さ一・五メートルから一・六メートル、幅八〇メートルくらいの白い紙がありました。白い紙には名前が書いてありました。それはベトナム戦争とイラク戦争で亡くなった戦死者の名前でした。その白い紙の前に百人くらいの大遺族が集まっています。ニュージャージー州だけの犠牲者でもこんなにいるのかと思いました。いきなり黒人の大きな女性が、わたしたち二人を見て、近づいてきました。戦死者リストの中に、十八歳のジミーと書いてあったのですが、彼女は泣きながらわたしたちに言いました「これはわたしの息子だ。わたしには夫がない。明日食べるパンを買うお金がないときだってある。ジミーは長男だった。彼は海兵隊に入って、『母さん、ほくが海兵隊に入ったから、パンを買う心配をしなくていいよ』と言ってくれたんだ。わたしは泣き狂った。兵隊だけには絶対になるなど、息子に言ってきたのに。息子は海兵隊になって、ヘリコプターに乗っているところを撃墜されて死んだんだ。」彼女は涙を流しながら、唇を固く結んでいました。その顔を見た瞬間に、自分の息子を殺された悲しみ、悔しさ、そして戦争に對しての憎悪を垣間見ることができた。そのとき、遠い過去、母が、人を恨むな、戦争を恨めと言ったことはこういうことだったのかと思いました。アズサがわたしをつつきました。彼女も目に涙をいっぱい溜めていました。小峰さんが話すと通訳しないといけない。でも、通訳したら絶対に涙があふれる、と思ったようです。わたしもはつと踵を返して、道路に向かってプラカードを掲げました。そしたら不思議と前を通っている車が徐行し始め、みんな口笛を鳴らしたり、手を振ったりしてくれました。その光景を見たときに、アメリカといえども「戦争はいけない」という

ことをみんな思っているのかもしれない、戦争に肯定的ではないのかもしれない、と思いました。
ニュージャージー州に行つて、もう一つ感じたことがあります。車が渋滞すると、運転手は必ず「テロがあったのかもしれない」と言いました。アメリカはテロに対する警戒が本当に厳しいものでした。

二〇〇七年には三週間、小・中・高・大学などを転々と訪れました。このときは特別大使ということで、観光地に連れて行ってもらいました。去年、ニューヨークに行つてきました。中・高・大学の三校を一週間で回りました。そして、国連にも行きました。国連の中では写真展が催されており、先ほど見せた、わたしの足の写真も貼つてありました。いろんなところから人々が写真展を見に来ていました。その中で印象に残ったのが、十歳くらいと五歳くらいの二人の男の子でした。ヨーロッパからお母さんと来ていました。その子たちがわたしの写真を一生懸命見ていたので、「証言しようかう」と通訳を介してお母さんに尋ねると、「NO」と言われました。すると、今度は十歳くらいの男の子がお母さんを口説いていました。興味があつたんでしょう。お母さんは「YES」と言つてくれました。男の子に説明をしました。そしたら、通訳の人が「この子に感想を聞いてみよう」と言いました。わたしは「十歳の子どもに聞いてどうする。きつと汚いとか、もう見たくないとかつていうにきまつてる」と言いましたが、通訳の人は男の子に感想を聞きました。男の子は何ていったと思いますか？わたしはびつくりしました。十歳の男の子が「写真を見てびつくりした。その次に悲しくなつた。そして、怒りが込み上げてきた」というんです。わたしは思わず、彼を抱きしめました。わたしはこの子のために、遠い日本からはるばる来たかと思つたのだと思つた。わたしは彼に言いました「ここにある写真は原爆による悲惨な写真だ。どうか君は、自分の国に帰つたら、この写真のことを心の中にしまつておくのではなくて、学校や近所で大勢の人にこの写真のことを説明してくれ。それが戦争をなくす一番の近道だと思ふ」と。彼ははつきり「YES」と答えてくれました。

わたしはこんな話はしたくない。人間が怖いと思つているわたしが、なぜこんな話を人前でできるよになつたの

か。第一に、母の力です。家族の力です。第二に、同じ被爆者の山口仙二さんの語りを聴いたのです。彼の語りを聴いて、わたしは涙が出ました。自分のことをここまでさらけ出して話せるのか、と思いました。仙二さんは、「われわれは人間ではない。非人間的な生き方をしてきた。こういう生き方を子どもや孫に味あわせていいと思う？ だめだ。それならば、あなたもさらけ出して、話をしてもらい」とわたしに言いました。でも、そんな簡単に人前で話すことができるもんか、とはじめは思いました。原爆被災者の仲間を支えられて、今日のわたしがいます。わたしが皆さんに言いたいことは、平和に対する知識・考え方。

わたしは過去からいままでの話をしてきました。核がないのなら、こんな話は絶対にしません。しかし、未来にも核は存在しているのです。いつ使われてもおかしくない。核は人間にとつて悪魔の兵器です。核のほかに一瞬で何万という人間を殺す爆弾なんてありません。あなたたちがこんな兵器はなさなくてはならない。もうわたしたちの時代ではありません。わたしが立ち入ってはいけない問題かもしれないけど、国が起こした戦争の犠牲者である被爆者としては、憲法九条二項。これはやっぱりなくてはならない、世界に誇る唯一の平和憲法だと思います。この先、この憲法を何十年、何百年と保持していくのは難しいです。だから、微力でもいいから、戦争を起こす要因だけは作らないようにしてほしい。これが、死んでゆくわれわれ、被爆者からあなた方へ贈る言葉です。皆さん、ご清聴、本当にありがとうございます。

質疑応答

——東日本大震災で原発が問題になっていますが、小峰さんは原発に賛成ですか、反対ですか？

小峰 反対です。人間の便利さを追求していくと、結果的にこういうことになるんだと思います。文明生活をどんどん積み上げていくことが本当にいいことなのか。原始生活をしろとは言いませんが、これから電気に対する考え方は変わっていくのではないかと思えます。はつきり言って、わたしは原発に反対です。でも、複雑ですね。たとえば、島根県にある原発では、それに従事する会社が百七十社あります。島根県に住む人の三分の一の人が何らかのあたちで原発にかかわっているそうです。そういう原発に生活が支えられている人がいると思うと複雑ですが、原則的にわたしは原発に反対です。

〔追記〕 なお、本稿は2011年6月15日に行われた平和講座の講話内容をテキストに起こしたものである。